**橡木　弘 （とちぎ・ひろし）**

**１、プロフィール**

生涯にわたり、現代美術の旗手として国内外で高い評価を受けた村上善男は、詩人橡木弘として生地盛岡と20数年を過ごした津軽の民俗と風土に根差し独自の詩法を確立した。

＜生没＞

1933（昭和８）年３月14日～2006（平成18）年５月14日

＜代表作＞

「痛風譚」「海豚」（『澱循環』）「羅宇景」「とほほ景」（塩景）他

＜青森との関わり＞

現藤崎町出身の父に盛岡に生まれ。晩年の20数年間を独立した美術家弘前大学教授として弘前市に在住。

**２、作家解説**

橡木弘（本名・村上善男）は1933（昭和８）年３月14日、父千代吉、母節子の長男として岩手県盛岡市に生まれる。村上家は代々染色業「越後屋」を営む。

父千代吉は富木館村（現藤崎町）久井名館の出身。村上家へは婿養子として入ったが橡木が６歳のとき母節子が病死、ほどなく父千代吉が再婚のため橡木と弟を残し家を出、以後祖父母に養育される。この幼児体験がのちの創作に大きな影響を与える。

1953年第38回二科展に入選。岡本太郎の知遇を得たことから本格的に画家としての歩みを始め、60年代に入り発表した注射針をキャンバスに散りばめたアッサンブラージュが画壇に認められ、以後生涯にわたって現代美術の旗手として活躍する。

一方、画業と並行して行ってきた詩作は、1982年に弘前大学美術科教授として弘前市赴任してきた頃より「早稲田文学」「詩学」「妖」「火山弾」「ぽえとりくす」などに精力的に発表。1984年に発表した第１歌集『澱循環』を皮切りに、生涯に『林檎蜂起』『棘』『鱈景』『塩景』の５冊の詩集を上梓した。

橡木の詩は、生まれ育った盛岡を原風景としつつ自らの美術作品、とりわけ弘前在住直後から開始した「釘打ち圖」シリーズと呼応させた津軽の民俗・風土に根差した作品も少なくない。また「ツツツトトテテトテテテトトト」といった独創的な擬音を用いたり病気や事故に基づく実体験をユーモアを交えつつもストイックなダンディズムから「詩に陰影を持たせることにてれ」（荒川洋治評）を表出させた独自の詩法を確立。また独特な字下げや改行による視覚的表現も多く、藤富保男らの視覚詩とも接触し、2001年にパリで行われた「ヴィジアル・ポエジィ」展に出品するなど積極的に活動したが、2006年５月４日に盛岡の自宅でその生涯を閉じた。享年73歳。

**３、資料紹介**

〇「北奧氣圈」第３号特集「ことばと美術」―橡木弘・村上善男

雑誌（総合文芸誌）・79頁

2007（平成19）年5月4日

210mm×210mm

詩人橡木弘と美術家村上善男（同一人物）の没後一周忌に合わせ弘前市の書肆・北奥舎から発行された特集号で、詩人船越素子による最初の橡木弘論「欲望のかたち―『塩景』を読む」とロシア文学者・詩人工藤正廣のエッセー「〝橡の花〟幻想―村上善男紀行」ほかが掲載されている。